



ひとりがみんなのために みんながひとりのために

～共に歩んだ50年～

生協コープかごしまの創立から現在まで、
組織の代表として理事長や専務理事等を務めてきた方々に、
当時の思い出やこれからの生協への期待等について
お話を聞いたインタビュー特集です。
なお、お亡くなりになった方やご病気などにより
インタビューがかなわなかった方々については、
生協に残された過去の資料からエッセイ、写真を転載しました。



組合員一人ひとりの力で 共につくり上げた 「私たちの生協」。

Interview – 初代理事長 福島 節子

初代理事長として夢中で活動。 困難も皆で乗り越えました。

私と生協活動の関わりは、生協コープかごしまの前身「くらしを守る消費者の会」が始まりです。1970年に鹿児島大学生協の中に生協運動を地域に広げるための特販部が置かれ、地域主婦への呼びかけがありました。私も「5人集まったら安い牛乳が買えるので話を聞きますか？」と近所の方から声をかけられ、物価高騰の時代に、家計に工夫ができればと参加しました。行ってみると、若い学生のような方が熱心に説明するのが、全国の協同組合の話、コープ商品の話、共同購入の話。最初は「一体何のセールスだろう？」と思いましたが、話を聞くうちに、真面目さと情熱が伝わってきました。そして、流通機構を単純化して商品を安くという仕組みに納得し、一度使ってみようと思いを決めました。

班の活動が始まると、これまで深い付き合いのなかった近隣の方との交流が生まれました。また、班の会合で学びを重ねるうちに、消費者運動のあり方を理解し、生活協同組合へ発展させる意義を感じるようになりました。そして、鹿児島にも生活協同組合を作り、全国の仲間と手をつないでいこうと、発起人会を組織。職員の方々と討議を重ね、1971年4月1日に「鹿児島市民生協」の創立総会を開催しました。このとき、自分たちで作った組合だからしっかり活動し、つぶすことがあってはならない、と強く思いました。当時、設立2年目の1号店建設のために多額の借入れが必要でその責任の一端を負っていたので、いざというときに金銭的に夫に迷惑をかけないためには離婚も…と密かに覚悟したことを覚えています。

市民生協が無事に設立され、初代理事長の任を受けました。私自身が、広島的女子高等師範卒業後に教師をしていた経験や、クリスチャンの家庭に

育ち、人のために働くことが当然と思ってきたこともあり、理事長の役は自然に受け入れました。夫も「やりたいようにやりなさい」と背中を押してくれ、活動に夢中になりました。1期から6期まで約10年間理事長を務めました。様々なことがありました。南日本酪農協同さんから牛乳の価格交渉があったときには、組合員代表として行きました。結果として、値上げを了承する代わりに乳脂肪分の高いコープ牛乳を作るようになったのは印象深い出来事です。活動中は、政治的な思想を囃されたり、運動に圧力をかけられたりもありましたが、主婦の力で明るく住みやすい社会を作るという思いで、皆で一致団結して困難を乗り越えました。3児を育てながらの忙しい日々でしたが、仲間や同世代の職員の方々と共に活動した楽しい思い出しかありません。

生協は、組合員一人ひとりの働きでできた「私たちの生協」です。その思いは現在も変わらず、当時の仲間とは90歳になる今もお付き合いがあり、お店にも通い続けています。50年の節目に、組合員も役職員の皆さんも、生協が誕生した原点を振り返っていただき、未来へつなげていただけたらと思っています。



プロフィール

「くらしを守る消費者の会」に参加。「鹿児島市民生協」設立代表発起人。生協で第1～6期の理事長、第7～11期の顧問を務める。1982年、SSDII（第2回国連軍縮特別総会）に代表派遣。くらしの助け合いの会（1986年発足）の初代表幹事も歴任。



Essay - 元理事長 木下 かよ子

梅雨にぬれる紫陽花のように

紫陽花の花は、性来の私の好みに合うものとは言いが、梅雨にぬれるその風情は、妙に心を落ち着かせてくれる。

ずっと昔の教室で、三好達治の詩だったと思うが「淡くかなしきものゝふるなり、紫陽花色のものゝふるなり…」という詩句を学んだ。「乳母車」という題だったように思う。紫陽花を見るたびに、懐かしさと安ど感を覚えるのはその詩句への追憶からかも知れない。あるいは又、小さな一つ一つの花が集合するあの花房の重量感のためなのか……。それに今年はまだ一つ。

今年の総代会後は、私達の生協はじまって以来の出来事が二つ続いた。創立以来の理事長福島節子さんの退任と、SSDIIへの代表派遣がそれである。この他に、忙しく又、緊張の続いた1ヶ月であった。今、ようやく新体制による活動もなんとかすべり出し、代表も太平洋をこえた。そのホッとする思いが、従来の紫陽花を見る目に重なる。

私達の生協の場合、理事長が交替しても、理事会が新体制になったと生協のあり方、方針が大きく変わっていくことはほとんどないと思う。しかし、創立以来12年目を迎え、新しい飛躍を期待される今、理事長交替と新理事会の発足を一つの飛躍の節にすることは、役職員共に心がけ、努力する必要があると思う。

4月からはじまったシステム改善も、一応軌道にのりつつあるとは言っても、本当に組合員にとってプラスの改善だと言えるようになるまでには、まだ残された問題も多い。又、82年の諸活動もすべり出したといっても内容を探め、実のある活動にするのはこれからである。

紫陽花の花が、雨の中で、その美しきの真価を發揮するように、長びく不況の雨の中で、私達の生協が、その真の美しきを、存在価値を發揮出来るように新役員体制の下で・組合員・役職員・心の一つに合せて努力しましょう。(1982年「生協報」7月号より)

小さな新米のままで…

「元理事長」として登場したり、紹介されたりするたびに、小さな体の私はますます体を縮こめる。元理事長とは言ってもたった一期、それも正確に言えば1年半。任期を半年残して鹿児島を後にした。

しかも、就任と同時に体調を悪くし、その年の9月には手術のために入院、生協強化月間の2ヶ月は療養中の身となってしまった。翌年の夏は夫の父親が胃ガンで入院。手術の効なく他界。和歌山県の過疎の町で看病したこの時も理事長不在の1ヶ月を記録した。

こうしてみると私が曲がりなりにも理事長を務めたのは1年余りでしかないことになる。就任してまもない頃、長い間当時のF地区で活動を共にした日高多恵子さん(故人)が、「新米理事長さんがんばって!」というメッセージを添えて、「日本の食糧」という新聞連載記事をスクラップして届けてくれたことがある。このメッセージを受け取った時のまま、私は新米理事長で終わってしまった。

しかし、この1年余は、組織としての生協、運動としての生協を実感した重要な時であった。理事長が新米であっても、入院中であっても生協運動は1日も止どまることはなかった。周囲に迷惑はかけたが、支障が多かったために私は3万人(当時)の組合員への信頼を深めることが出来た。結局、仲村さんの手助けを借りて、初代と3代の架け橋を務めたことが、2代目としての唯一の功績だったかも知れない。

(1991年6月「YOU・友 20周年記念号」より)

プロフィール

1970年暮らしを守る消費者の会に加入し、鹿児島市民生協創立総会に参加。第2期理事、第3～6期常務理事を経て、第7期の理事長を務め、本部専門委員会での家計簿活動にも携わる。1983年11月に県外転居のため退任。第8～11期顧問。



仲間と共に創っていく、
楽しかった懐かしき日々。
生協での学びが生きる基礎に。

Interview — 元理事長代行 仲村 律子

ひと月に15、16回も集まって 熱い想いで活動した幸せな時代。

生協との関りは、紫原の公務員宿舎で、鹿児島大学生協特販部の牛乳配達のコラシを見たのがきっかけでした。夫が鹿大生協の組合員でしたし、近所の方と誘い合って始めてみようということになりました。当時は、食品公害についてもかなり知られてきた時代でもあり、子どもに安くて良質な牛乳を飲ませられるなら、と「暮らしを守る消費者の会」に加入しました。生協の理念に触れたのは、その後のこと。鹿児島市民生協を設立する活動を通じて少しずつ学びました。1971年の鹿児島市民生協創立総会のときは、ホールが広いので本当に人が集まるのか心配しましたが実際は大盛況でした。私も壇上にいたのですが、集まった大勢の人々の姿に感激したことを覚えています。

生協の活動は楽しかったですよ。とにかく新しいことを学ぶのがうれしかったのです。生協法や生協の成り立ち、食品公害のこと、商品開発についてなど。多いときは月に15、16回も会に出たこともありました。夫が反対しなかったから続けることができたと思います。

創立から11年間にわたり常務理事を務めさせていただきましたが、当時は本部の事務所も手狭でしたから、常務理事会を自宅で開くこともしばしばありました。常務理事のときに、第二子を授かったので役員をやめようと思ったのですが「生協は子育てをしながら頑張る組織だからやめないでほしい」と説得されて続けました。今振り返ると「第二の青春」だったなと思います。

生協での思い出はいろいろありますが、大みそかに共同購入で仕入れたハマチが余ってしまい、近所の組合員さんに買ってもらったこともありました。子ども連れでメーデーの行進に参加したり、県庁へ

仲間数十人と抗議に出掛けたこともありました。機関紙の発行にも携わり、その時々課題について発信しました。社会問題への意見も掲載し、外部から反論をいただいた経験は印象に残っています。

生協に関わった日々を振り返ると、その後生活する上で基礎となるものの考え方を学んだ気がします。暮らしに関わる知識はもちろん、組織に対する考え方、民主的運営はどうあるべきかなど職員の方とも議論したこともありました。当時、共に頑張った友人や職員の方とは心が通じ合う仲間として、今でもお付き合いが続いています。あの頃は、生協は自分たちのもの、という熱い気持ちがあり、幸せな時代でしたね。

今の生協に期待することは、医療生協との連携や生協らしい商品の差別化など、そして、世界の社会情勢を見ると、戦争のにおいがしてくるような時代になってきている気がしますので、「よりよき生活と平和のために」「ひとりがみんなのために、みんながひとりのために」というスローガンを高く掲げて前進してほしいと願っています。



プロフィール

「暮らしを守る消費者の会」に参加。「鹿児島市民生協」設立発起人の一人として、設立趣意書作成にも携わる。生協で第1～7期の常務理事、第7期～理事長代行（非常勤）、第8期の監事、第9期に顧問を務める。現在は書と写真の世界を楽しんでいる。



Essay - 元理事長 久木田 幸子

20歳のあゆみ

育てますやさしい未来

かがしま県民生協は本年4月1日、満20歳の誕生日を迎えました。昨年9月末、10万入組合員を達成し、離島を含め、県下全市町村に組合員の輪がひろがりました。私は、記念行事や集いで喜びと誇りをこめて報告、ごあいさつして来ました。その度にこの20年の歩みの中で、たくさんの人々が知恵とエネルギーを注いで下さった事を思い胸が熱くなりました。ことに創立期の専従職員と組合員の献身と努力は大変なものでした。

創立期のくらしの状況は、高度経済成長のつげが一挙に出はじめ、何かおかしいと子育てに不安を持つおかあさんも増えていました。平和とよりよいくらし、安心・安全の食生活を求めて活動する生協へよせられる、おかあさんたちの願いと期待が、地域に根をはる大きな原動力になりました。組織事業活動も、組合員の要求に応えるために、精一杯の努力が重ねられました。創立から今日まで、仲間づくりは第一の課題でした。数よりも質の向上が、今大切ではないかとの意見がしばしば寄せられました。その都度、数は力なり、量は質を押し上げる、量と質の向上は同時進行させなくては、生協が市民権を得るには住民比を上げる事が必要など、話し合い、励まし合い数字の目標を持ってさまざまな挑戦をいたしました。生協が大きく成長すると共に、組合員も学習し、共育が成って社会的活動も評価されるようになり、県内最大の生活者の組織に成長して来ました。

1991年3月末現在、組合員、10万5,045、班数13,492、ブロック数19、地区数174、運営委員1,340、出資金15億4千万円、利用高192億、専従職員274、定時職員634という数字になっています。

商品、家計、生活文化を含めたブロック活動は、地域のくらしに根ざした活動として定着し、生活に密着した活動として評価されています。

生活の急激な変化、価値観の多様化、組合員の重層化、国際化、国際情勢の激変、あふれる物、情報、高齢化社会などなど、めまぐるしい社会変動の中で、その時々々の社会問題（平和・福祉・環境・資源・食の安全・教育等）にも先がけて取り組む組織として活動をして来ました。

生協は民主主義の学校だとよく言われます。それは自主的、主体的に学び合う場であり、一生学ぶ、かかわっていける組織だという事だと思います。実際、生協という活動体が大きく成長することで組合員の活動への関心が高まり、質的向上も出ています。暮らしを守る活動から創る活動へ、「平和、人、自然、環境、福祉、教育あらゆる事を視野においた地域市民として生きようではありませんか。」という生活提案がなされています。21世紀への道程は、県民生協が本当の力を発揮する時代ではないかと思います。

人と環境にやさしい商品づくりによる商品力のアップ、単協間の連帯を強化し、専従者集団の力と組合員の生活力を結びつけて、社会に貢献する組織に育てて参りましょう。

“育てますやさしい未来”を合言葉に！！

(1991年6月 「YOU・友」より)

プロフィール

1972年に生協加入。第4～6期理事、第7期常務理事を経て、第8～11期理事長。1985年、ユニセフスタディーツアーの一員としてパングラディッシュ視察。1988年、第3回国連軍縮総会に組合員代表で参加。第11期任期半ばの1991年11月逝去。



みんなで励まし合って
一步を踏み出せば
きっと社会も変えていける。

素敵な仲間に入れていただいた。
それが一番ありがたいことです。

生協との関りは「暮らしを守る消費者の会」の時代からでした。1970年頃に谷山地域に暮らしていたとき、紫原に住む友達から「安くていい牛乳の配達があるよ」と聞いて興味を持ちました。当時は、オレンジ味など混ぜ物をした牛乳が増えたり、価格も上がって困っていたときでしたから、この牛乳を子ども達に飲ませたい、と切実に思いました。その後、「鹿児島市民生協」が設立されました。谷山地区でも配達を実現させるために、仲間と共に組合加入の案内チラシをご近所のポストに配って回りました。みんな乳母車を押したり、背中に赤ちゃんを背負ったりという姿で頑張っていました。生協の運動という感覚はなく「子どものために、牛乳がほしい、お米がほしい」という気持ちだけで動いていたように思います。谷山地区は最初5人程でしたが、少しずつ組合員が増えて配達を実現したときには、みんなで喜び合いました。

生協では、運営委員長、理事などの役職に就きましたが、共同購入をしたいから誰かが役員にならなければとか、みんなをお誘いした手前やらなければ、という感じでお引き受けしてきました。1991年に、久木田幸子理事長が急逝された後を受けて半年間理事長代行を務めたのも、副理事長として故人の遺志をつながなければ、と決心したことでした。生協には様々な知識を持ったレベルの高い組合員の方々がたくさんいらっしゃいましたが、私はごく普通の主婦。子ども達のために生活をちょっとでもよくしたい、という一母親としての思いだけでずっとやってきたように思います。役員時代の仕事はたくさんありましたが、大変というより面白かったです。久木田さんをはじめ、ここでしか出会えない友達ができたことが一番でした。素敵な方々の仲間に入れていただいて、いろいろな産地へ出かけたり、生産者やメーカーの方と交流したりと、

Interview — 元理事長代行 外口 禮子

知らなかった世界も学ぶことができ、私の一生のうちで本当にありがたいことだったと思います。

今、生協について思うのは、共同購入の良さを見直してほしいということです。私の班は、谷山から星ヶ峯に引っ越してきて以来、40年以上続いています。この地域も高齢化が進み、一人暮らしの方も多いのですが、お互いに元気を確かめ合う機会にもなっています。現代は忙しいお母さんが増えているので便利になるのも良いことですが、班で集まる場を持つという生協ならではの良さも失ってほしくないと思っています。

新しい時代を担う組合員さん達には、生協は、一人ひとりが集まって力を合わせることで、助け合ったり、社会の問題を変えていける場ですよ、とあらためてお伝えしたいです。自分達の暮らしを良くしたい、守っていききたいという思いを持って、みんなといっしょに「せーの!」という感じで一步を踏み出せば、願いは実現していくと思います。今の時代ならではの課題もあると思いますので、これからの生協に期待しています。



プロフィール

「暮らしを守る消費者の会」に加入し、「鹿児島市民生協」の組合員に。1976年～77年のT地区（谷山地区）運営委員長を皮切りに、T地区・星ヶ峯運営委員長、第7期理事、第8～11期副理事長を経て、第11期（1991年11月～）理事長代行。所属する共同購入の班は40年以上続いている。



協同組合の理念を大切に。
社会を変えていくのは、
人々の力だと信じて。

Interview — 元理事長 清原 浩

平和、環境保護、障がい者雇用… 生協ならではの活動の推進を。

1974年に鹿児島大学教育学部に赴任し、障がい児教育に携わっていたことから、1981年に仲間達と任意団体「社会福祉法人麦の芽福祉会」（後に福祉法人）を発足させました。生協コープかごしまとは、「障がい者共同作業所 麦の芽」の活動を通じて、関わりを持つようになりました。同じく仲間達と立ち上げた「鹿児島子ども研究センター」も3生協（生協コープかごしま、鹿児島大学生協、鹿児島医療生協）に支援を受けており、深いつながりがあります。

第12期の理事長に、というお話をいただいたときには、理事の方々を自分がまとめられるかな、と少し心配しました。当時の女性理事の方々の中には、ちょうど当時の私と同年代の方もおられました。その世代は、いわば戦後民主主義教育の洗礼を受けた“第一期生”。創設期からのメンバーもおられて、激しい議論を交わす姿が記憶に残っています。理事長職については、せっかくお話をいただいたのだから、自分に大したことができるわけではないが、少しでも生協コープかごしまを発展させられたらと思い、お引き受けしました。

在任中の出来事で印象深いのは、地方出店の第一号である川内店、翌年に指宿店のオープンに立ち会ったこと、そして、この期間にICA（国際協同組合同盟）の東京大会が開催され、鹿児島で報告会が行われたことです。ここで、協同組合の理念である「協同組合は、自助、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯という価値を基礎とする協同組合の創設者たちの伝統を受け継ぎ、協同組合の組合員は、正直、公開、社会的責任、他者への配慮という倫理的価値を信条とする」という文言に触れる機会がありました。私は、学生時代に「生活と労働と教育」の関係を考える中で、ロバート・オーエンに出会いました。オーエンは、1844年にイギリスのロッチデールという町に初めて誕生した

協同組合の思想的支柱となった人物です。学生時代に受けた感銘が蘇り、協同の理念が私の人生にとって重要なものだと思わためて自覚したことは、忘れたくない体験です。また、私の理事長在任期間が「ロッチデール公正先駆者組合」誕生から150年の節目の年と重なり、記念集会に参加するためにイギリスを訪問したことも大変貴重な体験でした。

これからの生協コープかごしまには、平和維持、環境に優しい商品の創造、環境保護等、生協だからこそできる活動をさらに推進していただきたいと思います。また、障がい者雇用についてこれまでも大きな役割を果たされていますが、これからもより一層力を注いでくださることを期待しています。

私は、生協コープかごしまと関わりを持ったことで、数々の貴重な体験をさせていただきました。特に、組合員の方々、職員の方々との出会いにより“人々の力”の偉大さを感じました。世界はこれから変わらざるをえない時代です。協同組合の原点を大切に、組合員の力で、社会と地球環境をよい方向へ変えていく大きな原動力になってくださると信じております。



プロフィール

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得の上退学。重度知的障害児施設を経て、1974年鹿児島大学教育学部赴任。同学部名誉教授。臨床心理士。前・社会福祉法人麦の芽福祉会理事長。生協では、第12～13期理事長（非常勤）を務める。現在は、「鹿児島メンタルサポート研究所」所長。



Essay - 元会長理事 廣瀬 恵子

“3つの魅力”を 大きくしてください！

長い長い理事としての任務を先日の総代会をもって退任しました。たくさんの方から「お疲れ様でした」とのねぎらいの言葉をいただきましたが、私の方こそ組合員や職員の皆様に感謝の言葉を贈りたいと思います。特に組合員代表としての6年間、随分多くの方たちから助けをもらいながら（特に三輪副会長理事には大きく支えていただきました）、何とか活動を続けてこられました。本当に有難うございました。

30数年前、鹿児島へ来て最初に出会った人たちは「生協活動」を頑張っている方たちでした。子どもが生まれてから漸く組合員になり、子育て中はコープ商品に随分お世話になりました。お世話になるばかりでは申し訳ないと委員を引き受けたのが運のつき、理事までする羽目になり、「生協」が生活の中に大きな位置を占めました。それが18年も続きました。

長い活動の中で、生協には3つの魅力があると思ってきました。

まずは『コープ商品』。組合員の思いがいっぱい詰まっている安全・安心な商品。それを利用し、広めることでもっとより良い商品にしてゆけるのだと知って「生協」のすばらしさを実感しました。

2つ目は『運動』。世の中の動き、社会のあり様、そして暮らしに関わる様々な課題をしっかりと学ばせてもらいました。そんな中で問題になっていることを逸早くつかんで、運動につなげることもしてきました。平和や環境、福祉等、様々な問題を皆で考え、より良く

らしづくりを目指す活動こそが「生協」としてとても大切なのだと感じてきました。

3つ目は『人』。個性豊かな魅力的な人たちとの出会いがあったからこそ役員を続けてこれたとの思いを強くしています。人生を豊かにする大きな財産になりました。初めて理事になった時、文化委員会を受け持ち、担当職員は尾上紀美子さんでした。この人こそが「生協人」とつくづく思ってきました（石田さん、坂元さん、他にもすばらしい方々はたくさんいらっしゃいますが…）。生協のこと、くらしの問題、文化企画をどう進めるか等々、熱い思いを聞き、たくさんの方を教えてもらいました。いろんな角度から考え、身近な話題を提供しつつ、わかりやすく楽しく説明されました。難しいと思っていた課題も、話の魅力と語る熱意に心が動かされ、それでは頑張ってみようかと思わせてしまう人でもありました。そして、たくさんの方の組合員さんや職員の皆さんからの励ましや援助が私の頑張る力にもなりました。

さて、生協コープかごしまが20万人近い組合員を擁し、300億近い事業高という大きな生協になっても、私を感じてきた3つの魅力はなくならないだろうと思いますし、もっともっとその魅力を大きくしていただきたいと願っています。

職員としては、組合員のために、そして組合員と共に、精一杯頑張ることでお互いに元気になり、それが生協の発展につながり、より良い暮らしづくりになると考えて仕事をされることを期待しています。長い間、大変お世話になりありがとうございました。

(2002年 「YOU・友」7月号より)

プロフィール

1973年に生協加入。鹿児島市民生協J地区（鴨池新町）運営委員長を経て、第8～11期理事、第12～13期常任理事、第14期理事長、第15～16期会長理事、第17～21期顧問。生活文化委員会活動、くらしの助け合い会の活動などにも携わる。



誘ってくれてありがとう。
生協を通じて広い世界を
知ることができました。

Interview — 元会長理事 原口 君代

開墾した畑で農作業を経験、 平和活動でNYへも行きました。

1980年に結婚を機に鹿児島に来て、その後夫の転勤で転居した東京で共同購入を始めたことが生協との出会いでした。1988年に帰鹿し、鹿児島県民生協に加入。西陵店での手作り市への出品をきっかけに運営委員に誘われ、委員長、次に生活文化委員長も経験しました。組合員活動が生き甲斐の数年を経て、自宅で学習塾を始めて生協活動を休んでいたときに理事の話がありました。少し迷いましたが「推薦に答えねば」という気持ちで承諾し、仕事と家庭、他団体やPTA等で忙しいながらも家族の理解もあって続けることができました。2002年に会長になったのは、地方区理事の任期が終わるタイミングでした。憧れていた当時の会長・廣瀬恵子さんと副会長・三輪郁代さんに「常勤の理事長がいらっしゃるし、専従職員さんが頑張ってくれるから大丈夫」と説得されて引き受けました。外部会議で緊張する経験から、理事会では「誰もが発言し、参加しやすい雰囲気作り」を心掛けたつもりです。在任中、究極の産直を目指して「協同農園わかば」にも挑戦。みんなで石を拾い、萱を抜いて開墾し、種まきから収穫・店頭販売まで行いました。生産者に要望してきた「安心・安全な農作物を作ること」の大変さを身を持って知ることができました。

また、最も印象深かった活動は、2005年の戦後60年企画「ピースプラン戦後60」です。「6.17平和のつどい」の舞台企画である朗読劇「この子たちの夏」と戦争体験文集制作の2本立てで、私は文集制作を担当しました。応募作品の校正をしながら、戦時中の情景を想像し、平和の大切さを痛感しました。「自分達の朗読劇シナリオを作ろう」との声が上がり、戦争体験文集をシナリオ化するグループを立ち上げました。毎年地域ごとに地道な作業を続けて10年目の2015年、5冊の戦争体験朗読劇シナリオ集が発行できました。2010年には、当時の会長・中島美由紀さんとニューヨーク

での「核不拡散条約(NPT)再検討会議行動」にも参加。被爆者の声を生で聞き、学校での反核教育・国連の被爆パネル展に参加するなど、核と被爆を考え続けた1週間でした。鹿児島での組合員活動を通じて、これまで考える機会の少なかった戦争や平和について多くの話を聞き、各地の戦跡を巡って追体験する中で、たくさんの学びを得ることができました。

現在は、立ち上げから関わる「子育てひろば」のスタッフを続け、「くらしの助け合いの会」の幹事としても活動しています。生協には様々な分野の活動があり、個々人が興味のあることを学び、深める場があります。「誘ってくれてありがとう」。これは、毎年組合員に配布される「未来づくり手帳」の中で私が書いた挨拶文の一節です。私のように何も考えていなかった人間が、生協を通じて広い世界につながることができ、たくさんの友に出会えました。まさに「ありがとう」の想いです。生協コープかごしまが今後ますます発展していくためには、人が人を誘い、導き合って、組合員の輪が広く長くつながっていくことが大切だと思います。私自身もまだまだ楽しみながら生協に関わり続けていくことでしょう。



プロフィール

1988年に生協加入。運営委員、生活文化委員長、第14～16期の理事を経て、第17～19期に会長理事を務め、第20～21期顧問。2003～04年鹿児島県生協連会長。協同農園「わかば」、「ピースプラン戦後60」にも関わる。2010年、核不拡散条約再検討会議(ニューヨーク国連本部)に代表派遣。現在も子育てひろばにスタッフとして携わる。



生協は、私たちの
成長を支える場、
力を養う場だと思います。

生協で学び、活動したことが 私を目覚めさせてくれました。

私が生協と関わるきっかけとなったのは、子どもたちがまだ幼い頃に出会った、ある一冊の本でした。食品添加物や農薬の影響など、それまで知らなかった事実に大きな衝撃を受けました。子どもたちに安全なものを食べさせたくて、その本の「安全な食品が手に入るリスト」に載っていた生協に加入。共同購入を始め、いろんな学習会にも参加するようになると、知りたいことがどんどん湧いてくるように。「そんなに興味があるなら…」と勧められて運営委員になり、さらに学びを深めて仲間と共に活動していくほどに、生協は私の生活の一部になっていきました。

その後、地方担当理事になり、当時の坂元理事長から生協の理念や原則を改めて学び、生産者の人たちとも深く交流したことで、私の視野は大きく広がりました。以前は生協を“安心安全な商品を手に入れる手段”としか見ていませんでしたが、消費者の利益だけでなく、生産者の立場や事情も配慮しながら、社会全体がよくなることを目指すのが生協という組織なのだと気づかされたのです。衣食住だけでなく、社会も政治も環境も、私たちを取り巻くすべてのことは生活に直結しているのですね。

私が会長理事になった2008年は激動の年でした。生協法改正や大型店舗の進出などにより、生協も他店との競争の渦に放り込まれていた頃、年明けに起こったのがいわゆるギョーザ事件です。生協不信から脱退者が増え、利用も減っていくという大変な状況下、9月のリーマン・ショックで世界的な大不況に。この混乱する社会の中で生協はどうあるべきか…を皆で考え抜いて出てきたのは、「こんな時こそ協同組合の理念に立ち戻り、心を一つにして乗り越えていくしかない」という答えでした。大変な時期でしたが、組合員活動に力を入れて、“生協らしさ”を共有できたからこそ、

Interview - 元会長理事 中島 美由紀

何とか持ちこたえられたのかもしれませんが。この時、私は「生協の原点を忘れないように」と強く心に決めました。

個人的に忘れられない思い出の一つが、2010年の「核不拡散条約(NPT)再検討会議」への代表派遣です。ニューヨークまで一緒した被爆者の方々の「この悲惨な体験を二度と繰り返してはならない」という信念と凄まじい生き様に触れたことは、とても大きな体験になりました。その後、沖縄にも行って現地の人のお話を聞き、「平和や憲法の問題は決して他人事ではない、平和がなければ私たちの暮らしもない」と強く感じました。

50周年を迎えた今、生協は「助け合いの組織」として、地域での存在感を増しています。地域の困りごとの解決だけでなく、政治や行政に対しても声を上げ、よりよい社会をつくっていくことが、これからの生協に求められる役割ではないでしょうか。私たちの誰もが生活者であり、主権者です。生協は私たちの成長を支える場、力を養う場だと思います。そして、そういう場をつくってくださった創成期の方々に心から感謝申し上げます。



プロフィール

1989年に生協加入。運営委員、北薩ブロック商品委員会委員長、同ブロック委員長を経て、第15～17期の理事、第18～19期の副会長理事、第20～21期に会長理事を務め、第22～23期に顧問を務める。2010年、核不拡散条約再検討会議(ニューヨーク国連本部)に代表派遣。平和活動や災害支援等にも尽力。



一人ひとりが行動し、声を上げる。 苦しいときこそ原点に立ち返って。

結婚してすぐ夫が家業を継ぎ、25歳で東京から志布志市へ。環境が大きく変わり、知人もいない中で孤独に過ごしていました。5年位経った頃、隣町の義姉に誘われてコープの共同購入を始めました。地元でもと思い、幼稚園のお母さんに声をかけたら「あるわよ、班にいらっしやい」と。受取時には商品の情報交換をしたり、おしゃべりをしたり。そのまま料理教室や洋裁教室になることも。楽しくて楽しくて、生活も一変しました。添加物や環境問題の学習にも充実感を覚え、自然に運営委員長になっていました。そのときの仲間が一番の友人に。彼女は今でも志布志店の店舗委員長ですが、私が理事になるときに「あなたは中央で頑張ってる。私は地元を支えていくから」と背中を押してくれました。地元を元気に、と情熱を持って活動を続ける仲間の存在が私の原動力になっています。

副会長、会長を務めた2010年前後は、コープは苦しい状況下にありました。商品事故による不信の影響もあって供給高は下降を続け、会長時の2013年度は赤字決算に。自分に何ができるのか、組合員さんに何を伝えたらいいか、と思い悩みました。当時、職員が各部署で必死に頑張っているのを見ていたので、私達も目の前をしっかりやっていくしかない、信頼回復のために商品の良さや社会活動について伝え続けました。皆の努力もあって、会長任期最後の年に数字が上向きになるのを見届けることができ少し安堵しました。会長在任時には、もう一つ忘れられない体験があります。2014年の集团的自衛権行使容認の閣議決定に対して反対署名を行い、国会へ届けました。しかし、議員会館で会えたのは一部の政党の議員のみ。国民の声を届けようとしても、その前にシャットアウトされる現実に愕然としました。このときに、コープを作った先輩方が社会を変えてきたことを思い起こしました。どんなときも協同組合の

生きる支えになったコープ。
組合員活動を通じて、
人生を豊かに、地域を元気に。

Interview - 前会長理事 和田 千恵子

基本に戻り、一人ひとりが行動し、声を出し続けていかなければならないとあらためて感じた出来事でした。

これまで35年間コープに関わってきました。その中で様々なテーマに出会い、自分なりに取り組んできました。志布志で目の当たりにした過疎の高齢者の厳しい現実、離島の生活の苦勞、平和活動の難しさ、簡単には歯が立たない政治の壁、現代社会でのコミュニティーの在り方等々。難しい課題ではありますが、過疎の高齢者への弁当宅配開始や特販地域支援基金の実現等、活動が結果につながったものもあり、嬉しく感じています。

創立50周年。時代は変わり、コープに求められる役割も変化していくと思います。松蘭理事長の首長訪問等で、生活協同組合への理解が社会に少しずつ浸透してきていることも実感しており、地域での役割、福祉に貢献できることも増えていくと思います。私達にできることは、組合員活動を通じて地域を元気にしていくこと、そして、創立時の先人と同じく、伝える・広げる努力を続けることではないかと思います。私の生きる支えになり、人生に潤いをくれたコープ。「つながるってこんなに楽しいんだよ」と一人でも多くの方にこれからも伝えていけたらと思っています。



プロフィール

1987年に加入。運営委員、曾於南ブロック委員長を経て、第17～19期の理事、第20～21期の副会長、第22～23期の会長を務め、第24期より顧問。会長在任時に、「経営再建中期3か年計画」に携わり、特販地域組合員を応援する基金設立にも尽力。2015年NPT再検討会議（ニューヨーク国連本部）派遣。



消費者として作り手を
「買い支える」。
それが生協の基本。

Interview — 会長理事 山田 比呂美

普通の主婦でも会長はできる。 実践を通して次世代に伝えたい。

私は福岡で生まれ育ち、1986年、結婚を機に夫の赴任先である鹿児島へ来ました。翌年に長男が生まれ、同居した夫の母の勧めで生協に加入。義母は大阪北生協の設立に関わった人で、食や暮らしのことをいろいろ教わりました。その後、私は運営委員になったものの、生協主催のバレーボール大会で参加者の1人が負傷した際、運営側が行事保険をかけておらず、それを参加者に周知していなかったことがどうしても納得いかず、出産を機に組合員活動から身を引くことに。5人の子どもの育児や家事で忙しい毎日を送るうち、10年余りが過ぎました。2005年、久しぶりに託児付きの「くらし見直し講演会」に参加して長らく忘れていた“学ぶ喜び”が蘇り、その気持ちに導かれるようにLPA（ライフプランアドバイザー）の養成講座を受講。その年の秋にはLPA資格を取り、自宅のある大隅で組合員活動を再開しました。この時、いつの間にか行事保険が完備されていたことを知り、嬉しかったことを今でも覚えています。

2008年に大隅地方担当理事になったものの、活動経験の浅い私にはわからないことばかり。まずは地域のことを知ろうと、農産担当の職員に付いて生産者のもとを回りました。大隅は産直生産が盛んなのに産地交流会への参加が少なく、活動が低迷していることを知り、理事として何ができるのか悩んだ末に思いついたのがスタンプラリー形式の産直交流でした。交流会の年間計画を立てて年度始めに組合員に示すことで、組合員の参加が増え、継続的に複数の生産者との交流ができるのではないかと考えたのです。企画書を作って職員に働きかけ、他の組合員の協力も得て、2011年にスタートしました。そして今、この「大隅スタンプラリー」も10年が過ぎ、新たな岐路に立っていると感じています。

私が副会長になった2014年は「経営再建中期3か年計画」の初年度。当時の生協は経営的にも危うい状況で、

お店や職員は暗く、活気がありませんでした。けれども松蘭現理事長が問題点と目標を明確にし、絶対に再建するという強い意志を示してくださったので、私も付いていこうと心を決めました。そして、2016年に会長理事になったのは、中期3か年計画の最終年度を皆と一緒に頑張りたいという一心から。この期から副会長が3人になり、会長の私を含めた4人体制でのスタートでした。チームで支え合えば、私のような普通の主婦にも会長職ができるということを、実践を通して次世代にも伝えていきたいです。

生協という組織や組合員が地域のためにできるのは、地産地消を推進し、消費者として地域の生産者やメーカーを「買い支える」ことだと思います。価格や見た目を選ぶのではなく、環境や地域に配慮する消費行動がエシカル消費やSDGsの推進につながります。“お互い様”の精神で助け合う社会を皆でつくっていきましょう。

今回、50周年誌の編纂に関わり、改めて生協の歴史の重さを痛感しました。今日の礎を築いてこられた諸先輩方に敬愛を抱かずにはられません。生協コープかごしまの50周年という大きな節目に関わられたことへの感謝の気持ちでいっぱいです。



プロフィール

1987年、長男誕生をきっかけに共同購入を開始。2005年のLPA資格取得を機に組合員活動を本格化し、第20～22期の理事、第23期の副会長を経て、第24期より会長理事を務めている。大隅スタンプラリーの創設に尽力。大隅の戦跡ガイドも務める。



Essay - 元専務理事 村山 稔

20年前は若かった。そしてみんな 市民生協づくりに燃えていた。

「消費者運動後進地である鹿児島に消費者が主人公である本格的な消費者運動作りを進める」、「それまでの色々な経験や失敗に学び、健全な生協経営に務め事業を発展させる」、「主婦組合員や専従者の能力を十分に引き出し、私たちの手で市民生協づくりを進める」

鹿児島大学生協の支援のもとに「かごしま県民生協」の前身である鹿児島市民生協づくりを進めるに当たってみんなで確認した方向である。

当時の鹿児島県の消費者運動は、大学生協、労働組合、婦人会を中心にしたものであり、生活協同組合も大学生協、職域生協、住宅生協などで市民生協はなく、消費者が直接参加する消費者運動はほとんどなかった。

一方暮らしをめぐる状況は不良商品の氾濫、世論の担い手である新聞まで値上げするという諸物価の値上げが相次ぎ、家庭を守る主婦の不満は大きいものがあつた。

昭和40年代に京都から始まった市民生協づくりは、全国に広がる勢いをみせ、各地に於ける消費者運動のリーダーとして組合員の活躍がめだってきた。

大学生協の専従者や理事、そして「紫原地区」を中心とした主婦の中からぜひとも、私たちの市民生協づくりを進めようとの強い意志が示され、1年間の準備活動の後1971年4月に鹿児島市民生協は設立された。

設立当時はみんな若く30代のメンバーであり、朝早くから夜遅くまで寝食を忘れ一生懸命頑張ったといえる。

又、発起人のメンバーを始め、理事、組合員の皆さんも家庭を犠牲にして組合員拡大に、共同購入活動、店舗開店に全力を注いで戴いた。

設立された生協運営にあたっては、民主的運営を貫き、組合員の活動をベースに健全経営に務めることとし、鹿児島の経験や全国の事例に学び、より良いものを追求することとした。

当時の専従役員の個性もあり、「原則は頑固に、政策は柔軟に」対応することを強調し理事会でも活発な議論がされた。このことは市民生協の政策に反映され今日の発展を迎える政策的な裏付けともなっている。又、市民生協の共同購入、店舗活動は市内のスーパーなど他の店が持ちえない「消費者の立場に立って、テーマをもった活動」を展開した結果消費者に大きく支持されるものとなった。

創立20周年を迎えた今、全国の市民生協の中でも有数の生協として極めて順調に発展し、地域社会に根をおろし、日本の生協運動のリーダーとして大きな役割を果たしていることは、この20年間、一生懸命努力してこられた役職員、組合員の皆さんに敬意を表したい。

90年代～21世紀を展望する現在、人々の関心は個人的、家族的な問題から社会的なもの、グローバルな視点へと大きく変わってきている。環境問題や高齢化社会への対応など、組織的な取り組みが一層必要となっている。かごしま県民生協の役割はこれまで以上に大きくなっている。20年前の若いときにみんなで作った市民生協運動を、次の世代への贈り物として展望を持つことが出来ることを大変嬉しく思っている。

かごしま県民生協の一層のご発展を期待したい。

(1991年5月 「YOU・友 創立20周年号」より)

プロフィール

鹿児島大学生協常務理事として地域生協づくり支援。「鹿児島市民生協」設立発起人、第1～2期(1972年度)専務理事。1973年日本生協連に転任。



Essay - 元専務理事 高橋 壮介

あの時の私の戦略課題

1

野球用語でいえばワンポイントリリーフである。先代の村山さんが退任され、次の石田さんを迎えるまでの僅か一年間が私の専務時代となる。

しかも坂元常務(当時)が実質上のトップとして統括しており、私の常勤としての場は鹿大生協専務であったため、なおさらそのことがいえる。

2

依頼されたテーマは「トップとして何を決意していたのか」である。「何もしなかった」というのが実感であるが、しいて無理を承知でひとつだけひねり出すとすれば、次のトップ体制をいかに構築するか、そのことが私の戦略課題であったのではなかっただろうか。

日生協の九州支所長と協議したり、福島理事長(当時)とともに水俣を訪れたり、内部の根回しに時間を費やしたり、ひたすらその「戦略」だけを追求してきた期間であった。石田さんとの打合せも必要不可欠であったことは言うまでもない。

結局それらの折々に話し合ったことは、①地域生協が次代の生協運動の主軸となること②九州の地域生協の発展にとって鹿児島市民生協(当時)がポイントであること③そのトップには九州のドンが座らなければならないこと…等である。

3

僅か一年間の、そうしたたったひとつの「戦略」(それ以外のことはすべて坂元常務まかせであった)も無事やりとげたような気がする。いや、歴史的な経緯もそのことを間違いなく証明してくれた。

もしも計算できなかった例外があったとすれば、8年前に福岡県で5生協が合併して九州の拠点的生協が誕生したことであった。

4

「企業は人なり」という。「幹部がすべてを決定する」ともいう。企業以上に生協ではそのことは重要である。

組織の顔としてふさわしいトップがその椅子に座った時に、生協は成長躍進する。

いままたエフコープに身を置く私がかごしま県民生協にトップ人事を要請していることを、みなさんにはどう受け止めていただけるのだろうか…。

(1991年5月 「YOU・友 創立20周年号」より)

プロフィール

鹿児島大学生協専務理事、地域生協づくり支援。「鹿児島市民生協」設立発起人、第1期理事、第2期(1973年度)専務理事。後にエフコープ生協専務理事、1993~1997年度コープ九州事業連合理事長など歴任。



Essay — 元副理事長 石田 静男

○× 綾なす 20 余年

「20年の追想を」との原稿依頼。さてと筆をとると、昔、市民劇場で見た「怒りを込めて振りかえれ」という芝居の題名がふと口に出た。

県民生協の前身である市民生協、そのまた前史の鹿大生協での地域生協模索期まで含めると20数年になる。県民生協の歩みを登山になぞらえれば、8合目あたりから登山口方向を見下ろす感じで、過ぎ去り、遠ざかる程に怒りどころか全てが、夢の様に淡く、懐かしく思い出される。

振りかえり、思いつくままに列記すると、鹿大生協にあって地域生協づくりに夢をふくらませ、青臭い論議に口角あわを飛ばしていた頃のこと。

県連で協同して取り組んだ永吉団地店の失敗、赤字処理、そして県連の解散。

派遣した現坂元専務のハネムーンまで私が規制したと今もって恨みごとを言われているが、もう私の記憶にない(都合の悪いことは忘れる)。

しかしこの失敗が、その後市民生協として正しく出直すことにどれ程貴重な教訓となったことか。今思えば、安い授業料だった。禍を転じて福となす。

設立発起人会の前身であった「くらしを守る消費者の会」から創立総会の頃、私は講師、又は来賓で何をもっともらしく話していたのか、全く冷汗三斗の思いがする。

17年前、私は九州の連合会から再び舞い戻った。41才だった。理事の若い(?)お母さん達に迎えられた時、こんなオジンですみませんと独りつぶやいたのを思い出す。

11年前、始良の生協(現グリーンコープ)と合併を前提に「同棲」関係にまで持ち込み、新婚ホヤホヤの野元君を单身派遣までしながら土壇場で「破談」となった時の悔しさ。

酒免許申請の前提となる員外利用許可や定款対象地域拡大での県との折衝、酒免許却下措置や税務調査での追徴税では、熊本国税局、県税務所と激しく渡り合い、「生協やくざ」と呼ばれるほどだった。権力に向かうと、いやに短気でケンカ早い、私のオソマツな一面。

九州6生協で準備して3年前に導入した共同購入新業態のつまずき、経営の大幅後退と連帯組織の動揺は本当に辛く、正直身にこたえた。連帯組織の代表責任者として、その償いばかりでなく、所期の目的をこれからも背負い果たしたいと願っている。

エピソード的思い出は数々あるが、やはり私が直接携った1号店から5号店、8号店の不動産折衝は、それぞれに欲と得とが絡み合っていて、奮戦記的に書けば面白いが紙面が足りぬ。

とりわけ、1号店裏地買収での体験は、私のとおきのおきの逸話中の逸話。

寒い鎌倉山頂の古ぼけた一軒家で、深夜初対面の独身女教師とこたつをはさんで、二人だけで対峙した。その時の緊張と山の静寂。またの機会に。

思い出すままに列挙し、○×をつけてみると、順風満帆どころか、失敗と成功が綾のように織りなす県民生協の20余年であり、私の生協人生の盛期だったと思われます。

(1991年5月「YOU・友 創立20周年号」より)

プロフィール

1957年鹿大生協専務理事。1970年より九州生協協議会の専務理事として九州・沖縄の地域生協づくりを支援。1974年鹿児島市民生協に転任し第3～10期専務理事、第10期(1988年10月)～11期副理事長。1991年、エフコープ生協に転任、理事長就任。1998～99年コープ九州事業連合理事長。日本生協連副会長など歴任。



協同組合は私の人生そのもの。
しなやかに、したたかに
未完の運動を続ける。

Interview — 元理事長 坂元 義範

地域生協を作る、という夢 時代時代を支えた人々がいた。

生協50年の前史について。私が大学入学時は、60年安保の熱を帯びた学生運動の激しい時代でした。演劇鑑賞組織を通じて鹿児島大学生協と出会い、卒業後に鹿大生協職員に。最初の仕事は、労金を中心に労働者住宅生協などが造成した永吉団地に、県生協連が地域生協作りを目指した「永吉店」への出向でした。約9カ月間、早朝の市場の仕入れや牛乳配達、30坪程の店舗で丸鶏や魚もさばきました。その後、組合員組織もない75戸の団地での生鮮3部門の店舗経営は行き詰まり、1970年に閉店し、県生協連も解散。この失敗には多くの教訓がありました。鹿児島に地域生協を作るため、現存組織に依存しない、独自の組織と生活者として自覚する主婦を中心とした組織作りを目指しました。そして、生協コープかごしまの前身となる「くらしを守る消費者の会」を作るべく、一人で牛乳配達を始め、班を回っては、地域生協の意義を話し、賛同者を増やしていきました。

「くらしを守る消費者の会」を1970年に設立し、1年後に「鹿児島市民生協」設立が実現。喜びも束の間、生協設立と同時に事業が始まり、大学生協とは違う経営の厳しさに直面しました。草創期はすべてを試行錯誤しながら構築した時代。注文書や広報も手書き、登記などの法務書類も自分達で作成。少ない人員で早朝から深夜まで働きました。専務理事時代は様々な課題に対して組合員、職員と激論を交わしました。トップの役割として大切にしてきたのは説明責任です。1988年には九州生協事業連帯強化に関わり、共同購入の新システム導入等にも挑戦しましたが、大きな混乱も生じました。その後の無店舗事業発展に寄与する経験となったものの、個人的には悩みは深く、この頃から睡眠薬無しでは眠れなくなりました。九州の連帯活動については、後の2000年から7年間、コープ九州事業連合理事長という形で関わり、様々な課題に取り組みました。日本生協連の支援で鳥栖

にドライセットセンター実現という結果もありましたが、一方で、全国の役員も兼任する中で、生協コープかごしまに目が届いていたのか、という反省もあります。

50年を振り返ると、時代時代を支える人々がいて、組合員、取引先、農・漁協の協同組合人に恵まれました。生協コープかごしまが協同組合の原則堅持を受け継ぎ、一貫して活動を続けてきたことは誇りです。同時に継続すべきです。成長、前進のために厳しい言葉になりますが、職員には、協同組合とは、協同組合人になるとはどういうことか、今一度考えてほしいと思います。ICAの「宣言」に「生協運動は完結しない、作り続ける運動だ」とあります。“しなやかに、したたかに”。私の協同組合人生もまた“未完の運動”だと思つづく思います。我が人生、悔いだけ。重い決断もしましたが、良かったのかと今も逡巡します。その思いも含めて、結果として、協同組合は私の人生そのものです。

50周年を迎えて私も節目ですね。これからは、私的に行っている麦の芽スタッフとの学習会、上町九条の会を続けながら、労働者協同組合という新たな形が持つ可能性に強い関心を抱いているので、学びを深めたいと思っています。



プロフィール

「くらしを守る消費者の会」事務局を担当。「鹿児島市民生協」設立発起人。第1～10期の常務理事、第10～14期の専務理事、第15～18期の理事長（常勤）を務め、第19期の副会長を経て、第20期から常任顧問。日本生協連常任理事、日本生協連九州地連議長、2000～2006年度コープ九州事業連合理事長、鹿児島県生協連会長等歴任。



組合員主義が原点。 資本主義社会の中で 生協で働く意味を考える。

Interview — 元副理事長 東 賢二郎

すべては組合員と地域から 原則堅持こそが変化対応の力。

入協は1976年、担当は「K地区」と呼ばれていた草牟田・城山地域。「遅配・誤配の東」という異名も取りましたが、名物組合員を始め、多くの組合員の優しさに支えられた3年間。組合員の力を実感できたスタートでした。

組織部という部署に異動になり、そこで尾上女史という上司に出会いました。組合員を主人公に、上手に役割分担しながら、一緒に活動していました。生協という存在が、組合員の暮らしや平和、そして環境問題など、地域社会を良くすることにつながるという想いが、自然に組合員に伝わっていたように思えました。今考えれば、彼女と一緒に働けたことが、私の生協人としての原点に思えます。組織部での7年間は「市民生協」から「県民生協」への発展的時代。民主的な、そして自主的・自発的な組織の在り様や運営の仕方について、組合員とも喧々諤々議論しながら模索し続けた時期でもありました。

新規事業・共同購入・不動産開発・大隅地方統括などの経験を経て、常勤役員そして専務理事に就任しました。創立30年、21世紀を迎えた節目に、「21世紀ビジョン」を提案。働く職員が誇りと確信をもてるような…生協の存在理由と生協で働く意味を一人ひとりに考えてほしいとの願いもありました。専務時代、借地問題で旧城西店を閉店せざるをえないようなつらい出来事もありました。組合員の切実な声に、生協のお店が生活拠点としていかに重要なのか痛感させられました。

地域の協同・連帯の拡がりと同時に、県域を越えた「事業連帯」もまた必然との認識であり、重要なテーマでした。生協人生36年の内、のべ11年九州の事業連帯構築の任務に就きました。最後の7年は、生協コープかごしまでの職を辞し、最期の任務と決意しコープ九州事業連合に移りました。特に生協コープかごしまには優秀な人材を派遣していただき、多大な負担を

おかけしました。全国連である日本生協連とも、九州の地での共同事業として、商品共同開発や、将来につなげる物流基盤を中心としたインフラ整備も進めてきました。事業連帯(合)と言えども、「組合員のくらし発・地域発」の視点を基本に、そのことだけは貫き通せたのではないかと考えています。事業連合としての方向性もほぼ定まり、そして長年連帯の場で支援してきた熊本での拠点的生協づくりの目途が立ったこともあり、2010年に理事長としての職を辞しました。

格差と分断そして貧困の拡大、平和への脅威と環境問題など、お金と利潤追求を目的とする資本の論理が優先される社会と時代。それに対峙して、人間と協同の論理を本質とする非営利協同の生活協同組合の存在。人と人の協同とその実感、気づきと成長そして共育…。プロセスそのものに大きな価値があると思います。そして職員もまた協働の中で生協人として鍛えられる、そんな生活協同組合という場に身を置けたことは大変幸運であり、そして誇りでもあります。生活協同組合の存在理由とその価値を更に高め、原則堅持・変化対応を力に、「生活協同組合らしさを生活協同組合らしく」発揮していきたいものです。



プロフィール

1976年入協。共同購入、組織部長、共同購入部長を歴任。1986年、イギリスの協同組合大学へ留学。1989年に九州事業連帯へ出向、1993年に帰郷して不動産部長、店舗事業本部、購買事業本部事業開発部長、大隅統括部長を経て、第14期(1996年)常勤理事、翌年常務理事、第15～17期専務理事、第18期副理事長。2004年に生協コープかごしまを退職しコープ九州事業連合へ。2007～2010年度、同事業連合理事長。



人と人をつなぎ、
地域の点と点をつなぐ。
それこそが生協の役割。

Interview - 理事長 松園 孝夫

“暮らしに寄り添う”という 生協の理念を実現したい。

生協コープかごしま創立50周年という大切な節目を、現役の理事長として迎えることに対して非常に身が引き締まるような想いです。

私自身は1977年に入協し、今年で44年になります。当初は生協とは何なのかもよくわからないまま必死に目の前の仕事をこなしていた私に、一つの転機がきたのは2000年のことでした。北海道産品を全国の生協に供給する卸会社「コ・ジャスナ」が経営破綻し、私が再建チームの一員として現地に派遣されることになったのです。「今まで通り、生協の組合員に北海道の美味しい食材を届けたい」という一心で、全国の生協から集まった仲間たちと共に必死で頑張りました。冬はマイナス25度にもなる地で单身生活をしながら、北海道全域の生産者を回り、信頼関係を築き直した一年間。私がそこで学んだのは、人と人のつながりの大切さでした。

鹿児島に帰ってからも生産者とのつながりについて考え続けました。2000年以降、食の安全が脅かされる出来事が頻発しましたが、商品の安心・安全は生産者との信頼関係があってこそ成り立つもの。売り手と買い手が対等で、隠し事のない関係を築くことが大切だと思います。そして、生産者の暮らしが成り立つようにすることも生協の役割の一つです。生協が組合員と生産者を“つなぐ”ことで、組合員が生産者を買支える。そのためには、学習会や交流会を通して商品の価値を組合員にきちんと伝えることが大事だと考えます。そうやって深く学んだ親が子どもにそれを伝えていく。創立50周年を迎えた今、親から子へ、またその子どもへと、三世代にわたって生協の精神が受け継がれていることをとても嬉しく思っています。

この50年間に世の中は大きく変わりました。高齢化が進み、地域の小さな店がなくなって、買い物や生活

が困難になりました。そんな中、生協コープかごしまは鹿児島という地域で何ができるのか。今後はそこに向き合うことが大きな課題となります。地域の暮らしを支える一つの方法として、数年前から薩摩川内市で移動販売を行っています。生協だけで地域の困り事をすべて解決することはできません。自治体や社協、自治会などとも連携し、相互協力をしていくことが必要だと思い、私は3、4年前から各地の自治体を訪問して首長と懇談を重ねてきました。地域における生協の一番の役割は、やはり“つなぐ”ことだと思います。生活者のニーズを拾い上げ、必要なところとつないでいくコーディネーターとしての役割が求められているのです。

生協コープかごしまが生まれ、半世紀が過ぎた今、これからどこへ向かうのかという未来のビジョンを描き、方向性を示すのが、現理事長としての私の役割だと思っています。50年という過去の積み重ねが今であり、今の積み重ねが未来へつながります。だからこそ、常に「生協とは何なのか」と自問自答しながら、鹿児島の人々のよりよい暮らしのためにできることは何か、これからも考え続けていこうと思います。



プロフィール

1977年入協。店舗精肉担当、商品部畜産課長、商品統括室長などを経て、「コ・ジャスナ」の経営再建のため北海道に1年間派遣。帰鹿後、畜産事業部長、商品開発仕入本部統括、第19期常務理事、第20～22期専務理事。第22期(2014年4月)より理事長。他に日本生協連理事、鹿児島県生協連会長、鹿児島医療生協理事(株)コープサービス代表取締役社長、鹿児島県ユニセフ協会理事を務める。



安心安全な商品を 供給することが 組合員から託された使命。

Interview — 専務理事 高山 和士

自分を救ってくれた生協に 恩返ししたい一心でした。

前の会社を辞め、「さて、これからどうしようか」と思っていた時、熱心な組合員だった妻から「生協が職員を募集しているよ。受けてみたら？」と声をかけられ、採用試験を受けたことが私の生協人生の始まりです。当時は30歳になる直前で、小さな娘が2人もいた私を採用してくれた生協に、「人より多く働き、実績をつくって恩返しをしたい」という気持ちで一歩を踏み出しました。

店舗や共同購入、商品開発、店舗開発、店舗運営などを経験したのち、1998年からの4年間、総菜・ベーカリー事業部の部長として各店舗の総菜・ベーカリーコーナーの立ち上げを担うことになりました。この頃は寝る間も惜しみ、1日に20時間くらいは働いたかもしれません。「総菜・ベーカリー部門で日本一を目指すよ」とみんなに声をかけ、文字通り命がけで頑張りました。総菜コーナーに初めてのお客様を迎えた時の感動は今も忘れません。

その後、無店舗事業部の統括を任じられ、各センターの指導に当たることになりました。その頃のセンターはあまりよい仕事ができる環境ではなかったので、5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）を徹底することに。今ではそれが当たり前のこととして職員に浸透しているのを大変嬉しく思っています。

コープ九州事業連合に出向して福岡で4年間を過ごし、58歳で鹿児島に戻った時、生協は厳しい時代を迎えていました。2008年のギョーザ事件を機に全国で生協不信が生まれ、生協コープかごしまも2013年度決算で大きな赤字を出し、組合員から「お店も職員も暗くて、買い物に行っても楽しくない」という声も上がっていた頃。2014年からの3年間を「経営再建3か年計画の年」と位置づけて事業の立て直しを図ることになり、私は店舗事業の責任者に任命され、

店舗の改装や企画力の強化、金曜コープ市等の曜日サービスの設置、総菜コーナーの充実等、職員と共に取り組みました。何より組合員に喜んでもらえる店にしようと、接客・買いやすさ・楽しさ・活気…全てにおいて“地域の一番店”を目指すことに。そのためには働く人の心が一つになることが大事です。そこで私が次に掲げたのは、“あいさつ日本一”でした。笑顔のあいさつは自分や相手へのロイヤリティ（誠実さ、忠誠心）を高め、おもてなしの心にもつながります。すべての職員が笑顔であいさつをすることで、生協という組織がよりよいものになり、組合員の皆さんを幸せにすることができると信じています。

生協コープかごしまは、50年前に“子どもに安くていい牛乳をたっぷり飲ませたい”というお母さん達の願いから始まった組織です。生協は安心安全な商品を供給することが一番の使命であり、私たち専従職員はそれを組合員から託されていることを忘れてはなりません。50年という歴史の重みを改めて感じ、そこに関わったことを心から誇りに思います。



プロフィール

1984年入協。紫原店、玉竜店、南谷山店の店長等を経て、店舗事業部企画運営の担当、コモテックこうべ研修、店舗開発担当に。総菜事業の立ち上げや確立に尽力。無店舗事業統括やコープ九州事業連合への出向、店舗事業本部部長等を経て、第23期の常務理事、第24期より専務理事。他に、コープ九州事業連合理事、鹿児島医療生協監事を務める。



時代時代の よりよき生活のため 生協は進化し続ける。

Interview — 専務理事 上城 秀人

人と人のつながりが 生協の素晴らしさ。

約40年前の生協の就職試験。生協という組織がなんたるかも知らぬままに受験した私は、面接で「人勧凍結」について質問されました。突然の難問に必死に絞り出した答えは覚えていませんが、「ものの見方や人間性」を問われていたかと思います。入協当時は大変な成長期で、組合員拡大が至上命題でした。私もトラックで展示試食会や配達後の班での説明会に奔走しました。社会的には食品添加物問題等に関心が高い時期で、主婦の方々も熱心に話を聞いてくれました。時間を忘れて夢中で働いていましたが、センターにはいつも仲間がいて楽しかったことを覚えています。この頃の上司から、生協とは何か、生協らしいものの見方や社会に目を開く機会を与えてもらいました。この出会いは最初の幸運でした。

1989年には、当時の「連邦的重層的」運営方針に基づいて大隅区区長として鹿屋へ赴任。ここでは、熱心な組合員の方々と共に、時間をかけて話し合う民主的な協議過程を経験し、組合員活動というものをあらためて教えていただきました。その後、異動で鹿屋をたつときには、「どこに行っても頑張っ！」という寄せ書きを綴った小さな紙をいただき、生協らしい人間的なつながりに感激した記憶があります。

寄せ書きを免許証に忍ばせ、九州生協事業連帯（コープ九州の前身）に出向しました。日本生協連九州支所で修行する形で4年ほど雑貨担当に。この時もまた出会いがあり、名物バイヤーの下でカタログ注文の原則や責任、厳しさを学びました。大きい利益を生む企画の面白さ、欠品を許さない納期との戦い、ときに無茶もした刺激的な日々でした。この時は、一時期組合員活動からは離れましたが、生協運動の基盤となる事業に向き合う時間となりました。

その後1996年に鹿児島に帰任し、雑貨担当、店舗、

福祉事業立ち上げ支援、機関運営などに携わり、各々の課題に夢中で取り組んできました。印象深いのは、2007年の生協法改定の際に規程の見直し担当になったことです。新たな勉強の連続で苦勞もありましたが、機関運営の考え方、基礎を作る貴重な経験にもなり、現在の仕事につながっています。

生協50周年の今、世界はコロナ禍にあり、生協の注文配達への需要も高まっていますが、これからの時代を見据えると、組織も仕組みも、そして職員の働き方も、さらに進化・深化する必要があると考えます。組合員の新しいくらしを実現するために、デジタル技術を駆使した改革を推進し、一人ひとりに合わせてより便利に、より役立つシステムへ。もちろん、生協がこれまで貫いてきた原則を守り、平和をはじめとした社会的課題に向き合い、協同組合を未来につないでいくことはゆるぎない根幹であり、協同組合人として自覚する職員と共に実現していきたい私自身の課題です。これまでの出会いと学びに感謝しながら、社会に役立てる生協という場にいる誇りを胸に、前へ進んでいきたいと思っています。



プロフィール

1983年入協。かごしま東ブロック班担当からスタート。運営本部大隅区区長を経験後、九州生協事業連帯へ出向（4年）。帰鹿後、商品部（雑貨衣料商品担当）、谷山店店长等を経て、組織支援本部へ。福祉事業、機関運営、対外渉外担当、40周年担当、県連担当等を歴任し、組織運営本部長。第25期より常務理事、第26期2月より専務理事。